～障害児教育　春の学習交流会～
やっぱり三木先生は面白い

今回の「はるがく」は5月28日に三木裕和さん（立命館大学産業社会学部教授）を迎え、リモートで開催されました。50名をこえる参加者が集まり、和やかで心温まる学習会となりました。残念ながら参加されなかった方のために大まかな内容と「はるがく」の様子を紹介します。

三木裕和さん講演要旨

特別支援の現場に限らず、おびえていて、自己防衛的、攻撃的な人々がいる。例えるならばハリネズミのよう。現代社会の能力主義的生存競争、貧困、虐待、教育における「荒廃」、などにより構造的に生み出されているのではないか。「障害特性を踏まえた指導」が必ずしもうまくいくとは限らず、教育目標が大人の側にあり、子供の要求に基づいていないことが一番の問題だ。クリニックとしてではなく教育が教育らしく展開されていくことが大切。

大阪の大島悦子さんの実践を紹介。虐待や迫害を受けた子どもが、無力感からどのように離脱したか。K子ちゃんが人生初めてのハロウィンパーティーをクラスのうるさ方の男子を巻き込んで成功させたり、友達とのけんかで和解したりなどの経験を通して、この世界で生きていけると実感したエピソード。

子どもの発育のために良かれと思って様々なアプローチをするが、その方法論や評価にとらわれてしまい、子どもからは理解してくれない大人と思われることもある。子どもは元来自由な成長を望んでおり、支援者でありよりどころでいてほしい大人からの自由のはく奪という悪い循環に陥ることもあり、彼らを発達主体としてとらえることが必要。「障害特性」と決めつけずに、分かってもらったという実感、情動共有体験を通して「人の心を知りたいという気持ち」が生まれる。そこから伝えたい、分かりたいにつながる。

ダウン症の子どもたちの「わがまま」と四歳ごろの「誇り高い」時代を比較して、芽生えた自立と挫折の間で揺れる様子と挫折から「誇り」を取り戻す「親しい導き手」が必要だ。

ゼミの生徒で不登校になった学生が、卒論のテーマに選んだ、いわゆる影の薄い子どものかかわりの中で心の成長を遂げて教員になった。

三木先生の講演の内容はざっとこんな感じだったと思いますが、最後の学生の話が私には特に印象的でした。どのエピソードにも共通しますが、子ども時代から大人への成長はずっと地続きで、三木先生がその広がる先の見通しを緩やかにつけてあげることによって、次のステップを自分の足で踏み出せるように「親しい導き手」としてかかわって来られた経験が心にしみました。

3ページへ↙

教員免許更新制、ついに廃止！

5月11日、教員免許更新制が廃止されました。教育職員免許法の改定により、施行される7月1日以降は更新手続きなどが不要となり、更新制の効力が残る6月末までに期限を迎える教員に対しても、必要な手続きを取れば更新講習を免除する救済策が適用されます。また、講習を受けずに失効していた場合も、免許状取得に必要な単位を修得していたことの証明等を都道府県教委に提出して申請することで、免許状が「再授与」されます。教員の未配置や未補充の要因になっていた免許更新制が廃止されることは喜ばしいことです。

しかしその代わりに、教員ごとに研修履歴が記録され、校長などが「指導助言」を行うことが義務化されることは、自由で自主的自発的だからこそ有意義である研修の在り方を根本的に突き崩す重大問題です。文部科学省は今夏をめどに研修内容などを示した指針を策定するとしていますが、教員免許更新制のように煙たがられるものになってしまっては元も子もありません。民間教育団体や組合主催など、主催団体を差別することなく研修として認め合い、自主的な研修のすそ野を広げようではありませんか。

高校教育研究委員会公開研究会

教育DX下における高校教育の新しいかたち

報告：児美川孝一郎さん（法政大学）

■6月25日（土）17：00～19：30

■GIGAスクール構想の先にあるとされる教育DXとは一体何か？キャリア教育の専門家、児美川孝一郎さんが、学習指導要領改訂を乗り越え、高校生の学びや成長を保障する主権者教育のあり方についてお話します。

ZoomミーティングID：824 0358 6617

パスコード：0625

2ページから

もちろん、今回もユーモアたっぷりで、すべての話を希望にあふれる話にしてしまう三木先生はさすがです。質問コーナーでも、若い先生方の日々の実践の困難に寄り添いながらもクスッと笑ってしまうような解決の提案をされて、相談をした方々の表情がパッと明るくなりました。こんな感じの先輩、大人って素敵ですよね。でも、まずそういった相談を初対面の参加者から引き出す懐の深さに驚きました。

近頃、私は幼稚部の子どもたちとブランコに乗る機会が多くありました。ブランコって速く漕いでもゆっくり漕いでも往復する時間は一緒なんですよね。誰が乗っても「ゆー」から「ら」は一緒。単純だけど奥が深くて楽しい。なんか人生みたいじゃありませんか？三木先生はこんな感じ分かってくれますよね。

手稲養護学校　桑原岳夫

2023～2025年度

石狩学区公立高校配置計画

2次募集後の学級減で小規模校6校ついに「小規模校の在り方の検討が必要」と言及

道教委は6月7日に公立高等学校と公立特別支援学校の配置計画案を発表しました。新聞各紙が穂別高校の募集停止や岩見沢・富良野市の再編統合などについて報じられ、石狩学区については、あすかぜ高校・平岡高校がフィールド制から普通科へ転換することが取り上げられていました。しかし石狩学区の計画に「小規模校について中卒者やこれまでの進学状況、学校・学科の配置状況などを考慮し、在り方の検討が必要」との見通しが記載されたことをとり上げた新聞はありませんでした。

石狩学区ではここ数年、「2次募集後1学級相当以上の欠員」による学級減が復元されていません。実際には9月の計画決定の際に扱いが公表されることになっていますが、決定事項と勘違いしている管理職も見られます。その仕組みにより、「2次募集後1学級相当以上の欠員」が連続して生じた学校では学級減が急激に進行し、入学学年が「望ましい規模」に満たない小規模校が6校まれました。2019～2022年度をあわせると、配置計画であらかじめ示された削減数は19学級ですが、欠員で23学級が新たに削減され、実際には配置計画の倍以上の学級減が行われています。これは中卒者数が増加し学級増が行われた年度も実施されており、今年度は学級増しながら削減するという、極めておかしな現象が起こりました。他の学区では、いわゆる進学校であるかどうかにかかわらず、同一学区内で機械的に学級削減がすすめられています。他学区から見ると石狩学区のやり方はかなり意図的だと言えます。

4月の石狩地区地域別検討協議会である私立高校の理事者は次のように発言しました。「地方の学校を守ることはとても大切です。道教委はそのことに大いに力を注いでほしい。一方、私ども私立学校は都市部に偏在しているので、都市部の教育は大いに私学に任せてほしい。新しい公私連携の在り方として検討すべき課題だと思います」。公立高校で削減された分の受け皿は私学です。ここ数年間で、私立高校への進学比率は約5%も増加しました。

そして道教委は、いよいよ小規模校の「在り方の検討が必要」と言い始めたわけです。意図的に小規模校をつくり出しておいて、その去就を検討するという手法はまさに「確信犯」です。学校をつぶし続けてきた道教委が見据える先には「統廃合」を進めるであろうことは誰の目にも明らかなのではないでしょうか。

本年度から

「進路指導に関する業務」は割り振り変更対象業務です。

ちょっと耳よりな話

見学旅行や宿泊研修でよく活用される「勤務時間の割り振り変更」の対象業務に、「進路指導に関する業務」が加わりました。これは昨年度の道高教組と道教委との定員教育予算交渉の結果、新たに付け加えられたものです。具体的には、ホームルーム担任等が調査書・推薦書等の出願書を作成する業務、調査書等の作成に関する委員会審議の業務、出願書類を大学等の学校へ提出する業務、願書や自己アピール文などの点検業務、入学者選抜や就職のための面接指導業務を指します。「あらかじめ」予定や計画していることが求められていますので、月別の行事計画を作成する際に「調査書作成期間」「面接指導月間」と加え、位置付けておくことで「あらかじめ」設定していることになります。活用してみてはいかがでしょうか。

憲法闘争集会（オンライン学習会）

■「ウクライナから考える

戦争しないですむ　平和な世界のつくり方」

■講師　伊藤千尋さん　（国際ジャーナリスト）

■6月22日（水）18：30～20：30

敵基基地攻撃能力配備、軍事費倍増の大合唱のなか、憲法9条の現実的な意味を考えましょう。

参加希望は高教組札幌支部へメールでお知らせください。